

幸いなクリスマス礼拝が終わり、今朝は今年最後の礼拝です。1年を振り返ると、たくさんの感謝と共に、痛ましい出来事、今なお続く世界の苦しみが心に浮かびます。平和を祈りつつ、私たちが御心に適う日々を歩むことができるよう、祈ります。

占星術の学者たち

現在、京都復興教会が使用しているのは、新共同訳聖書です。初版から既に30年が経過して、今では馴染み深い聖書となりました。しかし、新共同訳が発行された当初、大変な批判を多く受けました。今朝の箇所もそのひとつです。口語訳では「東から来た博士」となっていたところを「占星術の学者たち」とし、大騒ぎになりました。私の両親は、天気予報の占い番組があるだけでチャンネルを変えるような、純粋(?)な牧師でしたから、この翻訳に、烈火の如くに怒った一人でした。このたび、聖書協会訳が発行され「博士」が返り咲きました。やはりなあと思います。

しかし、この占星術の学者たちという言葉にも、あえてそうした意味があります。彼らはマジと呼ばれた異教の学者たちで、天文学や魔術が専門分野でした。バビロンやペルシアがその起源と言われ、彼らの技術は Magic、すなわちマジック(手品)の語源として現代にも通じています。評判の高いマジは、王や権力者の助言者として、地位を築いたようです。彼らの精神の土台は、古代の教えであり、先祖からの膨大な知恵が財産でした。しばしば、世の中で常識とされている事柄は、10年経てば時代遅れだと言われます。ひとたび「時代が変わった」となれば、誰もまたそのことに異を唱えません。家庭のあり方、社会のモラル、食生活や冠婚葬祭、どんどん変化する中で、自分たちこそは「当たり前だ」と思っているのです。

占星術の学者達は、そんな世の中で、いつもアウトローで馴染めなかった人たちだと言えるでしょう。彼らは鋭い目で、もっともらしいことは、実はマヤカシであり、人々が嫌うことの中に、本当の価値が隠れていることを知っていました。

日本の現代社会には、引きこもりやオタクの世界が存在します。占星術の学者達の末裔は、意外とそんな日陰に今も息づいているのかもしれない。彼らの中には、必死に社会に抵抗し、本当の自分の心と魂に響く答えを探して、見えない命がけの旅を続けている人たちがいると思います。彼らが、「本物だ」と認める存在と出会う時、そこには純粋な喜びと希望が輝くことでしょう。

彼らが、命がけでイエス・キリストを礼拝した姿は、私たちにとって、どれほど大きな祝福の証明でしょうか。求道心と献身の思いに、豊かに答えてくださる神の恵みが、ここに表されています。ヘロデ王はおろか、祭司や律法学者たちは、知っていても出かけませんでした。主を信じるクリスチャンのモデルは、彼らではありません。私たちも、死線を越えて行きましょう。信仰という冒険の旅に出発しましょう。